
日朝戦争・最前線 ~ If I die in a combat zone ~

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日朝戦争・最前線
I f I d i e i n a c o m b a
t z o n e

【Nコード】

N8267J

【作者名】

流水郎

【あらすじ】

「この戦争を通じて、日本は変わる」……20XX年、国連は北朝鮮との全面戦争に突入する。日本もまた、国連軍の一員として自衛隊を北朝鮮へ派遣。陸自隊員・東堂英治は、信念と共に出征した。

A c t 1 (前書き)

注意書き

・リアリティを求めたため、残酷描写多数です。見てしまった後での責任は取りかねますので、ご注意ください。

A c t 1

もしも 俺が戦場で死んだら
故郷のみんなに伝えてほしい
俺はベストを尽くしたと

もしも 俺が戦場で死んだら
可愛いあの子に伝えてほしい
楽しい思い出 抱いて逝くと

もしも 俺が戦場で死んだら
親しい友に伝えてほしい
銃に向かって俺は死んだと

もしも 俺が戦場で死んだら
俺の墓に名前はいらない
ただ一人の男が生き 闘い 死んでいったと
刻んでほしいだけさ

die in a combat zone

…… 20XX年 広島県・呉……

「いよいよ、開戦か……」

野戦服を来た自衛隊員が、海を眺めながら呟く。

曇り空の下には多数の艦船が並び、報道のヘリコプターが宙を飛び交っている。

まだ若いその隊員は、緊張した面持ちで虚空を見つめていた。

「東堂」

名を呼ばれ、ハッと背後を振り向く。

自衛隊の制服を着た、凜とした風貌の女性が、そこに立っていた。

「ああ、小野三尉」

「緊張してる？」

朗らかな声で、小野と呼ばれた女性は尋ねる。

陸上自衛隊隊員・東堂英治陸士長は頭を掻いた。

「ええ」

「それはそうよね。ついに北朝鮮へ出征するんだから」

小野は停泊している輸送艦『おおすみ』を眺めた。

かつて空母と間違われた全通甲板を持つ輸送艦へ、自衛隊員たちが乗り込んでいく。

「この戦いを機に、日本は生まれ変わるのよ。国連軍の一員として北朝鮮を倒す……平和ボケから脱却して、強い日本へ……」

「……」

東堂は一瞬浮かない顔をしたが、すぐにそれを消す。

「高校の頃から、小野三尉は……」

「先輩、でもいいわよ？」

小野は微笑を浮かべる。

「……先輩は昔から、日本の未来を心配していましたね」

「まあね。私の父は自衛官なのに、国のことなんて考えないような人だったから……」

露骨に嫌悪の表情をする小野に、東堂は苦笑した。

「そこは、人それぞれですよ」

東堂は知っていた。

小野の右翼的ともいえる思想は、父親への反発から来ているのだということを。

高校で知り合ったときから、何かと政治・国防の問題を熱心に学んでおり、自衛隊の在り方や憲法第九条への不満を時々口にしていた。一般の若者達はそういったものに対する興味が薄いため、彼女を慕っていた東堂以外に、彼女の言葉に耳を貸す者はいなかった。

だが東堂は、田舎を出て都会の高校へ入り、右も左も分からないでいた自分に優しく接してくれた小野に、思いを寄せていたのだ。自衛隊に入った今でも、それは変わっていない。

「とにかく、東堂」

東堂の肩に、小野の手が置かれた。ぴしりと体を硬直させる。

「必ず、帰ってきてよね」

「……………はい、勿論です！」

東堂が非の打ち所のない敬礼をし、小野も敬礼を返した。彼女のためにも、絶対に生きて帰る……………東堂の瞳は信念に燃えていた。

……………

……………

…

「おい、東堂」

荒地を進むトラックの上で、東堂は顔を上げる。

89式小銃を持った同僚が、心配そうに見つめていた。

「どうした、ぼーっとして」

「ああ……ちょっと、日本を思い出して」

苦笑を浮かべ、東堂は答える。

「しつかりしろよ、ここは敵地だぜ？」

「ああ、そうだな」

不整地を走るトラックは、時折大きく揺れる。

東堂は89式小銃を握りしめ、これからの戦いに思いを馳せていた。他の仲間達も、緊張からか静まりかえっている。

アメリカを始めとする国連軍の後ろ盾があれば、北朝鮮を打倒することは容易いだろう。

だがそれは政治家の机の上でのことであり、全戦で戦う自分たち兵士にとって、事はそう簡単ではない。

今ここにいる仲間の内、何人かは日本に帰れないかも知れない。

勿論、自分も……

ふと、東堂はトラックの進行方向に、一人の子供を見つけた。
地元民だろうか。10歳過ぎと思われるその子供は、何かを抱きか
かえてトラックへと駆けてくる。

……まさか！……

子供が抱えている重そうな物体の正体に気づき、東堂は大声で叫ん
だ。

「対戦車地雷……！」

刹那。

轟音と爆炎が、周囲を包んだ。

Act 2

……西暦20XX年 北朝鮮……

鬱蒼とした森の中を、東堂英治は歩いていった。

顔には濃い疲労の色が浮かび、手にする自動小銃はいつもより更に重く感じた。

頭にかぶっているヘルメットの感触にさえ、煩わしさを覚える。

……この森を抜けられれば……

その言葉を、東堂は脳内で何度も唱えていた。

味方部隊の駐屯場所に到着すれば、助かる。

生きて日本へ帰れる。

それだけが、彼の心を支えていた。

不意に、近くで物音がする。

反射的に小銃を構えてそちらを向くと、白人の兵士がグレネードランチャー付きのM16突撃銃を東堂に向けていた。

アメリカ兵だ。

「……なんだ、ジャップ日本人か」

軍服の左肩にある国章を見て、そのアメリカ兵は銃を降ろす。

東堂も銃口を下に向けた。

「俺はビリー＝ケンドール。アメリカ陸軍伍長だ」

「陸上自衛隊、東堂英治陸士長です」

英語で答える。

「お前も、この森を抜けようとしてるのか？」

「ええ」

「お前のいた部隊はどうした？」

その問いに、東堂は唇を噛んだ。

「子供の持った対戦車地雷で、トラックごと……生き残ったのは俺だけです」

「そうか……俺も似たようなもんだ」

ビリーは溜め息を吐く。

彼も顔に疲労の色が浮かび、ヘルメットからはみ出してい金髪も土埃で汚れていた。

「行き先は同じだろ。一緒に行こうや」

「はい」

道連れができたのが心強く、ビリーと並んで歩き出すと、東堂の足取りが少し軽くなる。

雑談しながら、二人は森の中を歩いていった。

「俺の生まれた下町にさ、可愛い女の子がいたんだよ。その子は一流の汚し屋だった」

「汚し屋？」

「通行人の服にジュースだのアイスクリームだのをつけて、相手がそれを拭いている間に荷物を持ち去る商売さ。俺もワルだったからな、よく一緒に遊んだよ。いつからか、姿を見なくなっちまったが……トードーは、好きな女とかいるか？」

尋ねられ、東堂は頬を掻いた。

「ええ、一応。ハイスクール時代からの先輩です」

「へえ、年上好みかい？」

「いや、別に大して年の差は……」

そのとき、東堂の腹が大きな音を立てた。彼はここで初めて、自らの空腹に気づく。ピリーは大笑いした。

「飯にしようや。俺も腹減ったし」

「は、はい」

足下に蛇などがいないか確かめ、二人は座り込む。

東堂は持っていた戦闘糧食？型を取り出し、パックを破く。

ビリーもアメリカ軍の代表的な戦闘糧食であるMREのパックを取り出し、化学反応を利用した使い捨てヒーターに入れて、水を少し注いだ。

しばらくすると蒸気が発生して、レトルトパックが温まる。

「アメリカのレーションも大分マシになったが、それでも外国の方が美味そうだなあ」

ビーフシチューを食べながら、ビリーはぼやいた。

「日本人はライスにおかずの組み合わせにこだわるよな」

「そういう国ですからね。韓国軍も必ずキムチかビビンパが付くらしいし」

東堂は米を口に運ぶ。

「ロシア軍なら体の温まる物だしな」

「イタリア軍はワインとデザートつきらしいですね」

談笑しつつ、二人は食事を続ける。

一見平和そうな風景だが、それでもここは北朝鮮店：敵地なのだ。食事をしながらも、周囲への警戒は怠っていない。

「だがよ、例え死ぬほど不味い飯しかなくても、食事だけが俺達の楽しみなんだよな」

ビリーは付属の軍用チョコレートをかじった。

東堂も塩鮭を食べ終わり、パックを地面に埋めるため足下の土をか

き分ける。

「ええ。飯が食えることがどんなに幸せか、身に染みて分かります」
二人は空になったパツクを埋めて処分し、再び立ち上がった。
夕方までには味方陣地につけるだろうと言い、歩き出そうとする…
…が。

「！おい」

ビリーが木々の向こうを指さした。
足音が聞こえる。

東堂がその方向を凝視すると、軍服を着た男達の姿が見受けられた。
手に握っているのは、AK-74突撃銃。
AK-47を発展させた、東側諸国で広く使われているアサルトラ
イフルだ。

……朝鮮兵！……

東堂の背を冷や汗が伝った。

敵兵はまだ遠い距離にいて、東堂達に気づいていない。

「隠れる」

近くの茂みの影に、二人は身を潜める。
しかしその時、東堂の89式小銃がビリーのM16とぶつかり、金
属音を立てた。
北朝鮮兵の一人がそれに気づく。
AK-74を構え、何事か叫びながら近づいてくる。

「……全部で六人か」

ビリーが小声で呟いた。
位置を気取られてしまった以上、下手に逃げても後ろから撃たれるだけだ。

かといって、このまま隠れていてもどうなるかは目に見えている。

「……グレネード手榴弾はあるか？」

「……はい」

「引きつけて、投げろ」

そう言われ、東堂は持っていたM26破片手榴弾を取り出し、安全ピンを抜いた。

レバーを握っている間は爆発せず、安全ピンを戻すこともできる。

敵兵達はじわじわと近寄ってくる。

朝鮮語で何か警告らしき言葉を発していた。

「……やれ！」

東堂は振りかぶって投擲した。

レモン型の物体が弧を描いて、北朝鮮兵のただ中に落下する。

「GO！ GO！ GO！」

ビリーが叫び、二人は二方向に走り出す。

直後、手榴弾が炸裂し、逃げ遅れた北朝鮮兵二人がその爆炎に巻き込まれた。

残る四人の敵兵が大声で叫びながら、AK-74で反撃する。

東堂は樹木の影に隠れながら、89式小銃のセレクターを安全位置から連射フルオートに切り替えた。

木から体を半身出し、薙ぎ払うように掃射。

ビリーもM16を撃つ。

「くそっ！ くそっ！」

北朝鮮兵が一人、ビリーの銃撃に倒れた。

残りの敵兵は木陰に隠れながら移動し、攻撃してくる。

東堂も遮蔽物から遮蔽物へと移動しながら、さらに発砲。

敵兵をまた一人射殺した。

残りは二人。

しかしその時、弾の発射が止まってしまふ。

「！ 弾切れか！」

東堂は咄嗟に木の陰に隠れ、空になったの弾倉マガジンを取り外す。

だが、突如敵兵の一人が雄叫びをあげて肉薄してきた。

鼻先に迫ったAK-74が火を噴くかと思われたその瞬間、その北朝鮮兵の頭部が破裂した。

「早くリロードしろ！」

ビリーが援護したのだ。

東堂が新しいマガジンを装着した時、最後に残った北朝鮮兵も飛び出し、ビリーに肉薄する。

怒りに駆られたのである。その敵兵に、ビリーは腰から抜いた拳銃を撃ち放った。

空中にライフル弾を撒き散らしながら、敵兵は倒れ……

辺りは再び、静かになった。

「トードー、無事か？」

「……はい」

東堂は呼吸を整えながら、敵兵の死体を見つめる。

ライフルの弾を頭部に受けた者は、頭蓋が半分破裂し、崩れた脳を晒していた。

濃い血の臭いが、東堂の鼻を突く。

戦闘中には大量のアドレナリンが忘れさせていた感覚だった。

東堂は、初めて人を殺した。

「……じいじ」

ビリーは、自分がベレッタM92拳銃で射殺した敵兵を指さす。

「仲間の名前を叫んでた」

「えっ……」

「朝鮮の言葉は知らないが、分かる。仲間の名前を叫んでいたんだ」

東堂の耳には、そんな声は聞こえてすらいなかった。

死の饗宴の中、生存本能が他の全てを忘れさせていたのだ。

自分が人を殺したこと……もしかしたら、相手が人間だったことさえも。

「……トードー」

ビリーが、東堂の肩に手を置く。

「すぐに慣れるさ」

「慣れる……？」

東堂はビリーを睨んだ。

「人を殺すのを、慣れるというんですか!？」

「そうするしかないんだよ。撃ち殺されるのが嫌ならな」

反論を許さないような物言いだっただが、ビリーもどこか哀しげな顔をしていた。

M16の弾倉を交換し、コッキングレバーを引く。

「自分の命と敵の命、どっちを優先させるかは自由だが、俺を道連れにはするなよ」

ビリーは北朝鮮兵の死体をまさぐり、食糧の類をはぎ取る。戦場では日常的に行われる光景だ。

「チッ、ろくな物持ってねえ」

「……ケンドール伍長は、何故軍に？」

東堂の問いに、ビリーは苦笑した。

「飯が食えるからさ。スラム育ちで残飯漁りばかりやってた俺には、破格の待遇だ」

「……………」

「チャップリンは言った。街中で一人殺せば犯罪者だが、戦場で百人殺せば英雄だ、つてな。その不条理は昔から変わらねえ。イエス様がどう思ってるかは分からねえが、とにかく変わらねえのさ。要するに考えるだけ無駄なんだよ！分かるか？考えるだけ無駄なんだ！」

ビリーは立ちあがった。

距離をとって後からついてくるよう、東堂に言う。

この様子だと他にも敵兵がいる可能性が高いため、彼が斥候を務めるのだ。

複雑な思いを抱えながら、東堂は彼に続く。

死んだ北朝鮮兵の目が脳裏に焼き付いていた。

戦場のリアルを身を以て体感し、生き残る信念さえも揺らぎ始める。

所詮自分は雑兵なのか。

ただ戦場に利用されるしかないのか。

疑問を持つことも、許されないのか。

……………この戦いで、日本がどう変わるんだ？……………

思考が混沌としていく中、東堂は森の中を歩き続ける。
しかし突如、銃声が響き渡った。

A c t 3

「！」

ビリーがドサリと倒れる。
右足に銃創が確認できた。

「伍長！」

「隠れる！ 狙撃兵がいる！」

ビリーの言葉に従って、東堂は茂みの影に隠れた。
狙撃兵の姿を探すが、迷彩やギリ・スーツで偽装した相手を見つ
け出すのは用意ではない。
そうしている間に再び銃声が聞こえ、ビリーが苦痛の声を上げた。
今度は腕を撃ち抜かれたのである。

東堂は思い出した。
ゲリラ部隊などの狙撃手が行う手口で、まず敵部隊の先頭に行く斥
候の足を狙撃し、動けなくする。
そしてその仲間達が斥候を助けるのを躊躇い、隠れ続けるようなら、
その目の前で斥候の体を一カ所ずつ撃ち抜いていく。
だが助けに飛び出そう物なら、その瞬間頭を撃ち抜かれる。

東堂は狙撃兵の位置を必死で探した。
しかしそうしている間に、ビリーは腹部を撃たれてしまう。

「トードー！」

ビリーが苦痛に耐えながら、叫んだ。

「俺を……俺を撃て！」

「！」

……仲間が目の前でなぶり殺しにされ、耐えられる者はいない。助けに出ても、全滅あるのみ。

ならば、自らの手で仲間を楽にしてやるしかない……

「俺はもう動けねえ！ お前の手で……撃て！」

東堂は震える手で、89式小銃を構えた。

……撃つのか？……

……撃たなきゃ二人とも死ぬ……

……伍長は仲間だぞ……

……このままじゃなぶり殺しにされるんだ！……

……仲間を撃てるのか？……

……撃たなければ、余計苦しませることになるんだ！……

凄まじい速度で葛藤が起きる。

さらに震える手を必死で抑え、ビリーに照準を合わせようとしたそ

の時。

木々の枝の合間に、何かがキラリと光った。

「ウオオオツ！」

雄叫びを上げ、光の見た部分に銃を連射する。

ウツ、という声が聞こえ、直後に遠くの木々から、何かがドサリと落ちた。

「伍長！ 伍長！」

東堂はビリーに駆け寄った。

狙撃は無い。東堂の射撃は確かに命中していたのだ。

「しっかりしてください！」

「ウ……」

ビリーはうめき声を上げる。

東堂は彼の上半身を支え、近くの倒木の陰まで引きずっていった。

「何で…敵の場所が分かった？」

「狙撃銃のスコープに光が反射していたんです！ 伍長、今応急処置を……」

だが。

再び銃声が聞こえ、弾丸が東堂のヘルメットを掠めた。

慌てて倒木の影に身を伏せる。

倒木の隙間から覗いてみると、百メートルほど先から多数の北朝鮮兵が銃撃を行っていた。

一個小隊ほどはいるだろう。AK-74の他に、SVD狙撃銃を持つ兵士もいた。

「何てこった……」

多勢に無勢……手先ほどは機先を制して対処できたが、今度は数が違いすぎる上、ビリーはもう動けない。逃げるのも難しい。

いっそのこと降伏するか……そう考えもしたが、仲間を殺したということが知られれば、生かしておいてはくれないだろう。絶望の二文字が、東堂の頭をよぎった。

「トードー……」

突然、ビリーはベストから弾倉を三つ取り出し、東堂に差し出した。

「俺が防ぐ……その隙に、逃げる」

「そんな！ できません！」

「俺はどの道、もう歩けない。お前だけでも……生き延びるんだ」

苦痛に顔を歪めながら、ビリーは半身を起こそうとする。

弾倉を東堂の手に握らせ、M16を構えた。

「人間つてのは馬鹿だからよ……俺達のことなんて、そのうち忘れちまうだろ……そしてまた戦争が始まる。だから……お前が生き延

びて、伝えるんだ。俺やお前の仲間が、ここで生き、戦い、死んでいったことを……」

ビリーは倒木から上半身を出し、M16を敵兵に向けた。銃身下部に装着された小型グレネードランチャーから、榴弾が発射される。

着弾地点で爆発が生じ、逃げ遅れた敵兵の体が吹き飛ぶ。

「行け！ ブラザー 戦友！！」

気づいたとき、東堂は走り出していた。

後ろを振り向かず、M16の弾倉をベストのポケットに押し込み、後ろではM16の発射音が聞こえる。

しばらくするとそれが止み、AK74の銃声のみが聞こえるようになった。

東堂はひたすら走る。

背後から追ってくる敵兵に手榴弾を投げつけ、爆炎を背に再び走る。横に敵兵が回り込む。

走りながら89式小銃をフルオート射撃。

一人、鮮血を拭きだして倒れる。

東堂の頬を数発の弾が掠めていったが、それすら気にとめず、東堂は走り続け、撃ち続けた。

心が何も感じなくなっていく。

人を殺すことに、嫌悪すら抱かなくなっていた

ビリーが言ったように、あつという間に慣れてしまったのかも知れ

ない。

手持ちの弾が尽きると、今度はビリーから受け取ったM16の弾倉を装着した。

米軍との連携を重要視する自衛隊の装備故、89式小銃は米軍の主力であるM16シリーズと弾丸・弾倉を共用できる設計になっているのだ。

再び、89式小銃が火を噴く。

……小野先輩……

……日本は平和ボケしている……貴女はそう言った……

.....

.....
でも.....
俺は.....
.....

⋮

⋮

⋮

自衛隊を含む国連軍と北朝鮮軍との戦いは、比較的短期間で終わった。
北朝鮮の旧政権は崩壊し、西側諸国はテポドンの恐怖から解放された。
日本は憲法第九条を改正し、自衛隊はより『軍』としての性格を強めていくこととなる。

しかし。

……

……

「…… AKも、結構調子の良い銃だ」

薄暗い部屋の中。

デスクの近くに倒れた死体を前に、東堂英治は言う。
弾痕の穿たれた死体は、着ている服装と階級章から自衛隊員……それも将官クラスであると分かる。

「89式小銃に慣れてると反動が強く感じるけど、フルオートでも

押さえ込める。何よりも頑丈で、メンテナンスも楽。値段が安いから手に入りやすいし」

手に持ったAK-74の銃身を撫で、東堂は笑う。

室内には他にも多数の死体が転がり、硝煙と血の臭いが漂っていた。

「何で……」

床に伏した女性自衛官が、言葉を発する。

弾を受けたらしく、声にも苦痛の色が混じっていた。

「何で貴方が……こんなことを……」

「小野先輩……正直言うと、理由なんてどうでもいいんです」

氷の如く冷徹な視線で彼女を見やり、東堂は言う。

「こいつらは俺達を雑兵として使い捨てにし、それをこれからも続けようとしている……あの北朝鮮で戦い、死んでいった連中の存在は、一体何だったのでしょうか……」

東堂はAK-74の弾倉を交換しつつ、淡々と語る。

「先輩、分かりますか？ 貴女の望み通り、日本は平和ボケから脱却しました。『テロリストの銃』と呼ばれるAKがここにあることこそ、その証拠です」

「違う！ 私が……私が望んでいたのは……！」

「違ってても違わなくても、あまり問題ではないんです」

東堂は再び笑みを浮かべた。

「『考えるだけ無駄』なんですよ、先輩」

東堂は窓に歩み寄り、ブラインドをずらして外を見た。
眼下に見える道路には、警察や自衛隊の車両が見受けられる。

「……先輩、日本は確かに平和ボケしていました」

銃を肩に担いで、東堂は扉へと向かう。

「けど俺は、そんな日本の方がまだ好きでしたよ。もう戻れませんかどね……俺も、日本も」

「東堂、私は……！」

「ああ、もう喋らない方がいいですよ」

東堂は小野の言葉を遮った。

「弾は急所を逸れたみたいだし、運が良ければ失血死する前に助けてもらえます。……さようなら」

……東堂がドアを潜って外に出ると、同じようにAKシリーズの銃で武装した一団がいた。

目出し帽で顔を隠している者もいるが、いずれも日本人だ。
彼らの足下にも、自衛隊員の死体が転がっている。

「外は？」

「装甲車が二台着ているし、戦車も向かってきているらしい。中島と宮村が二階に残って、RPGで攻撃するのはどうだ？」

「そつだな」

東堂は頷いた。

「適当に引っかき回して、脱出しよう」

「東堂、あの女……お前の知り合いなのか？」

「まあな」

短く答え、東堂は一団の先頭に立った。

口元に笑みを浮かべ、冷徹に銃を構える。

「さて、これより脱出する……撃鉄を起こせ」

.....

.....

かつてアメリカがベトナム戦争で経験したように、北朝鮮から帰還した自衛隊員達は、大半が精神を病んでいた。

また、そうでない者達も多くが何らかの形で戦争から足を洗えず、彼らによる犯罪・テロが多発。

日本の治安は急激に悪化し、自衛を目的として合法・非合法問わず銃を所持する国民も増え始めた。

一方、北朝鮮では新政権によって、平和主義を基とした国家作りが始まっていた。

..... f i n

A c t 3 (後書き)

お読みいただき、ありがとうございます

これは以前、「最強自衛隊が中国や北朝鮮をボコボコにする小説」に疑問を感じて書き始め、途中で放棄していた小説です。

思うところあって、連載中の艦魂小説が詰まっていたこともあり執筆を再開し、投稿しました。

私は政治の話に疎いので、前線で戦う兵士達にのみスポットを当てて書きました。

私がこの話を通じて伝えたいことは、読んでくださった皆さんが作品の中から察してくださればいいと思います。

では、今後も宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8267j/>

日朝戦争・最前線 ~ If I die in a combat zone ~

2010年10月12日10時14分発行